

県教育庁教育次長

鍵 本 芳 明



最近日本の優れたところを紹介するテレビ番組が増えたように思う。自動化された工場やお客さんに対する細やかな気配り、職人の徹底したこだわりなどに外国の方々が驚く姿を見る時日本人として誇らしい気持ち溢れてくるのは、私だけではないだろう。

新幹線や燃料電池自動車など、我が国の最先端技術は実に素晴らしいが、私が最も世界に向けて誇りたいものは、日本古来からの木造建築技術だ。私には、数年ごとに元気をもらいに訪れる場所がある。それは、法隆寺だ。千三百年もの間、風雪や幾多の災害にもびくともしない五重の塔は、圧巻であり、「小さなことにくよくよするな」といつも私を叱り、勇気づけてくれる。

私が法隆寺に関心を持ったのは、その改修に携わった西岡常一という宮大工の棟梁が書いた本に出会ったからだ。そこには、日本古来の木造建築技術についての熱い思いが綴られているが、また、それは、リーダーシップ論や組織マネジメント論でもあった。高い技術とプライドを持つ職人たちを束ねる棟梁は、学校組織を率いる校長と重なり、木の特性を活かしながら、千年も耐え抜く建物を作る職人のこだわりは、子どもたちの個性を生かし、成長を図る担任の学級経営にも通じる。

法隆寺では、山の南面に生えている木は南側に、北面の木は北側に使われ、向きも生えていた通りの向きになっている。南側の木は成長が早

いので節が多く、北側は少ない。見栄えがいいからといって、北側で育った木を南側で使うと長い年月でねじれてしまうそう。

西岡棟梁は言う。「木の癖は、悪いものではない。癖のあるものを使うのはやっかいだが、うまく使ったらその方がいい。癖の強い木は強く、癖のない素直な木は弱くて耐用年数も短い。木の個性を見抜いて使う方が強いし長持ちするが、個性を大事にするより平均化してしまっただ方が、仕事はずつと早い。そうやってしまえば、大工には、木の性格を見抜く力もいらず、訓練もいらない。それなら昨日始めた大工にでもできる。そして、そんな大工は使いやすい木を求め、『曲がった木はいらん、捻れた木はいらん。』と言い、使えない木は捨てられるようになる」と。人を育てる教育の仕事でも全く同じ事が言える。

棟梁の心にあるのは、「木は生きている。ならば、切る前と同じ環境にしてやれば、そのまま生き続けられるだろう」という木に対する深い思いやりだ。木の心を想像し、木を思いやる心が、一千年の命を支えている。

私たち教職員は、どれほど子どもたちの心を思い、その個性を生かし、伸ばしていこうとしているだろうか。また、管理職は、教職員の熟練の指導技術や教育への熱い思いを活かし、その力を組み上げて、真に強い組織を作り上げているだろうか。「大切なのは、人を思いやる心なのだ」と、法隆寺と西岡棟梁は教えてくれる。